



本社外観 (画像提供: UNICAST)

株式会社ユニキャスト

代表取締役 三ツ堀 裕太 氏

■企業概要

本 社：茨城県日立市大みか町 3 丁目 1-12
 事業所 (開発センター (ユニキャストラボ))
 ：茨城県日立市成沢町 4 丁目 12-1
 VBL3 階 (茨城大学工学部内)
 創 業：2005年 7 月 1 日
 従 業 員：34名
 事業内容：クライアントワーク事業、インフラ事業、
 自社サービス事業、CSR 事業

日立市に本社を置く株式会社ユニキャストは、2005年に創業し、今年で11周年を迎えた学生発のITベンチャー企業です。

同社を創設した三ツ堀社長は、小学校4年生の時に抱いた「システムエンジニアになりたい」という夢をかなえるため、工学部に入学し、大学院1年生の時に起業しました。

同社を動かすのは、社長を筆頭としたテクノロジー技術に魅せられた個性あふれる優秀な社員やインターン生たちです。

「テクノロジーを通して『驚き』と『感動』を創造し、人々の『夢』と『笑顔』を支えたい。」と語る社長は、次の時代を見据え、世界が必ず必要とする日が来るサービスを一步先に作り出すことで、同社が想い描く世界により近づいていきたいと考えています。

ベンチャースピリットを胸に、魅力的なサービスを世界中に発信し、たくさんの笑顔を作り出す同社の取り組みを取材しました。

(インタビュー日：平成28年8月18日)

[聞き手：筑波総研(株) 専務取締役 藤咲耕一]

ご自身の略歴や御社創業までの経緯についてお聞かせください。

■ 小学4年生で抱いたプログラマーへの夢

私は、千葉県銚子市で生まれ、幼少期は波崎町(現 神栖市)で過ごしました。高校は千葉県でしたが、大学は、茨城大学工学部システム工学科に入学しました。工学部を選んだ理由は、小学校4年生の時に抱いた「システムエンジニアになりたい」という夢をかなえるためです。

小学4年生だった当時、子どもから大人まで夢中にさせる「ドラゴンクエスト」というファミコンゲームが社会現象となっていました。

私は、たった1つのゲームが良い年の大人たちを夢中にさせ、さらに社会も動かしてしまうという現実を目の当たりにしたのです。

「これは、すごいことだ!」と小学校の先生にこの興奮を話したところ、ゲームの作り手である「プログラマー」という職業があることを教えていただきました。その頃から、私はプログラミングに興味を持つようになりました。

■ 夢をかなえるため、在学中に起業

私は、少しでも早くプログラミングの仕事をしたかったので、大学入学後すぐに関連するアルバイトを探しました。しかし、当時プログラム関係のアルバイトの募集はありませんでした。

この現実ショックを受けた私は、「アルバイトができないのであれば、自分で会社を作るしかない!」という熱意が芽生え、大学1年生の頃から、1人ぼんやりと「起業」というイメージを膨らませていました。

大学卒業後、私は同大学大学院の博士前期課程に進学し、学業と並行して本格的に起業の手続きを進めました。そして博士前期課程1年の夏、社員は私1人だけという有限会社ユニキャストを創業しました。

当時の私は、会社に勤めた経験が無く、契約手順や関連法規などの理解も乏しかったため、全て手探り状態でのスタートでした。しかし、自身の勉強に加え、応援して下さるお客様の支えにより、今年で11周年を迎えることができました。

社名に込められた想いや御社の経営理念についてお聞かせください。

■「柔軟な発想」と「ユニークな人材」が強み

当社は、テクノロジー技術に魅せられた個性あふれる優秀な社員たちによって日々成長し続けています。私たちは、どのような状況に置かれたとしても、常に明るい未来を想い描き、自分たちの可能性を信じて切磋琢磨することを忘れません。それは、当社の社名にも現れています。

「UNICAST」の「UNI」は、「ユニーク (Unique)」と「ユニット (Unit)」、「CAST」は「出演者」と「投げかける」という意味で、この2つを掛け合わせて社名を決定しました。

また、「UNICAST」は、「個別通信」という意味もあり、一人ひとりのお客様と密にコミュニケーションを取り、信頼関係を築いていきたいという想いも込めています。



社名に込められた想い (画像提供 :UNICAST)

当社の強みは、ベンチャー企業としての柔軟な発想とユニークで優秀な人材です。

今後も失敗を恐れずに突き進み、お客様のご依頼に対して「ワンストップサービス」で真摯にお応えすることで、多くの人の夢をかなえ、笑顔を生み出せる仕事をしていきたいと考えています。

■テクノロジーで、多くの人を笑顔にしたい

当社のミッションは、「テクノロジーを通して『驚き』と『感動』を創造し、人々の『夢』と『笑顔』を支えること」です。これには、私が小学4年生の時に思い描いた夢がたくさん詰まっています。

私は、世界中の誰もが自身の夢に向かって挑戦することで、いつか誰かの幸せと笑顔になると確信しています。当社は、テクノロジーを活用し、このような世界を創造していきたいのです。

また、事業のポリシーとして、「各社員がプロフェッショナルと言える専門分野を持つ」、「チームで解決にあたることを大切にする」、「お客様もチームの一員であることを理解する」という3つの柱を大切にしています。

私は各社員に対し、キャリアパスを自由に選択していく中で、その道のプロだと自信を持って言える人になってほしいと願っています。

そして、最高の仕事をするためには、お客様と良いことも悪いことも共有し合うことが大切であると日々伝えています。



ユニークで優秀な若い社員やインターン生に囲まれる社長

御社の事業概要や主力サービスについてお聞かせください。

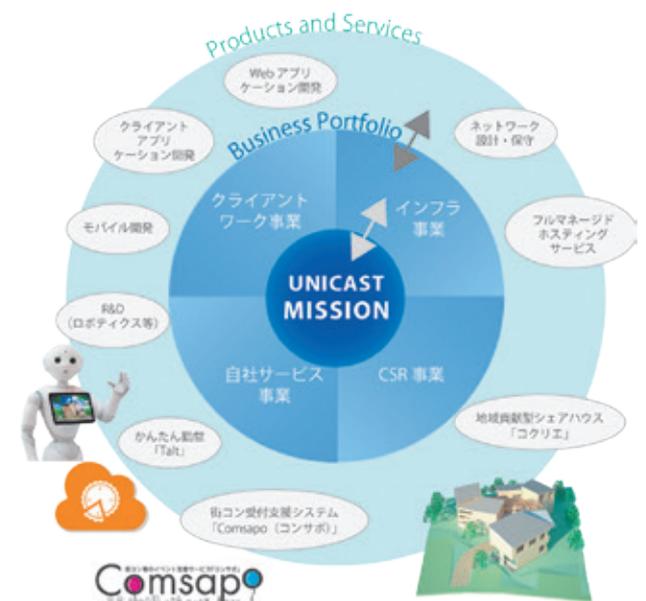
■次代が必要とする一歩先のサービスを

当社は創業時から、お客様のご要望に沿ったプログラム開発を行う「クライアントワーク事業」や自社サーバーをお客様にご提供する「インフラ事業」を中心に事業を展開して参りました。

しかし、私たちは、お客様から依頼されたサービスを生み出すだけに留まらず、これまで培ったノウハウを活かした新サービスを創出したいと考え、「自社サービス事業」の展開に踏み切りました。

この事業では、当社が10年間お客様からのご相談やご依頼をいただく中から見えてきた、各社共通とも言える課題を解決するためのサービスをご提供しています。

私たちは、次の時代を見据え、世界が必ず必要とする日が来るサービスを他社より一歩先に作り出すことで、当社が思い描く世界により近づいてほしいと考えています。



ユニキャストの成長エンジン (画像提供 :UNICAST)

■ 「Pepper」アプリの開発に乗り出す

当社は、「自社サービス事業」の1つとして、2014年末に販売が開始された「Pepper」の法人向けアプリケーション開発を手掛けています。



接客する「Pepper」の様子（画像提供：UNICAST）

「Pepper」は、SoftBank株式会社が提供する世界初の感情を持ったパーソナルロボットで、人とのコミュニケーションに特化しています。

現在、法人での活用にも注目が集まっており、毎月、販売開始から数分で1,000台が完売するほど人気を博しています。

当社は、ソフトバンクロボティクス株式会社の「Pepperアプリ開発パートナー」として認定を受けており、企業の営業活動をアシスタントする「Pepper」専用アプリをご提供しています。

■ ロボットが人々の笑顔を作り出す

私がこの事業に踏み出す決意をしたのは、ソフトバンクグループが初めてエンジニア向けに開催した「Pepper」の説明会へ参加した日の帰り道でした。

私は、会場で「Pepper」がマイクとカメラが備わっただけのただのロボットであると理解しているにも関わらず、見つめられると照れてしまう自分がいることに気が付きました。

その時、私は、「仕組みを理解しているエンジニアの私でさえ照れるという感情を抱くことから、普通の人ならもっと驚いたり、笑顔になるに違いない！」と直感しました。

私はこの経験から、「Pepper」が人間とコンピューター的意思疎通を円滑に行うためのインターフェース（装置）として、大きな魅力と可能性を秘めていると確信しました。

現在、当社が展開する「Pepper」向けのアプリは、住宅展示場で「接客営業」をする日本初のアプリのほか、銀行での「受付案内」、メーカーの「製品紹介」、空港や駅での「観光案内」など、お客様のご要望に沿って無限に開発することが可能です。

■ ロボットと共生する地域の将来像

当社は、2016年4月に茨城空港ビルと連携して、「多言語で接客するPepper」を試験導入しました。

導入の背景は、訪日外国人に対する土産品の販売促進です。空港内の店舗に陳列する商品は、全てが外国語表記されているとは限りません。従って、外国人のお客様はどの商品を選んだら良いかわからず、困ってしまいます。

そこで、当社が開発した「商品認識・案内」アプリを活用し、お客様が気になる商品を「Pepper」に見せると、英語や中国語などで商品説明を行います。すると説明を聞いたお客様は、安心して購入することができます。

今後は、空港をはじめ観光地や免税店、道の駅などでの導入も見込んでおり、訪日外国人への外国語対応策の1つになることを期待しています。

また、2016年5月に開催された「G7つくば科学技術大臣会合」の特別展では、当社のアプリを搭載した「Pepper」が、海外の大臣に出展企業とその製品について英語で説明しました。これにより、日本のモノづくり技術を世界にアピールできたと自負しています。

現在、地方創生が叫ばれていますが、ロボットが人間の手助けをしながら共生していく姿は、人手不足が課題の地域における1つの答えであり、将来像になるのではないかと考えています。



「ロボットと共生する地域の将来像」のイメージ（画像提供：UNICAST）

地域貢献事業の概要や地域に対する想いなどについてお聞かせください。

■ 学生と地域と企業を結ぶ場所「コクリエ」

当社は、「地域貢献事業」として、2015年5月から県内初となる地域貢献型シェアハウス「コクリエ（Co-Creationの略）」を運営しています。

当社は学生発ITベンチャーであるため、現在でも出身大学や後輩との強いネットワークを保持しています。また、数多くの仕事を通し、地元企業や自治体との信頼関係も築いて参りました。

現代の若者たちは、将来に対する不安や孤独と向き合うことを余儀なくされ、自分の存在価値や生きる意味を必死で探しています。

人は誰でも、「成長したい」、「誰かに必要とされたい」、「仲間を大切にしたい」という願いを持っています。これは、世代を問わず共通の思いであり、学生も例外ではありません。そして、学生は、この思いを満たす機会を強く求めています。

私は、これからの時代の企業に求められることは、学生と地元企業が繋がるきっかけや企業が優秀な人材を地元で育てる場所を創造することだと考えました。そして、当社の答えがこの「コクリエ」だったのです。



「コクリエ」内でのミーティングの様子（画像提供：UNICAST）

■ 茨城にいても東京以上の仕事ができる

私は、今も昔も、地方に住む学生の多くが、東京に出なければ自分がやりたいことに挑戦できないと考えている傾向にあると感じています。

しかし、私は実際に自分が起業して10年が経ち、多くの方々を支えられながら仕事をしていく中で、茨城にいても東京と変わらない、あるいはそれ以上の仕事をする事ができると確信しています。東京は必要な時にだけ行けば良いのです。

私は、茨城で育った優秀な人材が場所にこだわらず、自由に楽しく仕事ができる空間として、「コクリエ」を育てていきたいです。

そして、この場に集まった学生には、学生時代からまちや企業と関わることで、より人生を豊かにしてほしいと願っています。また、企業側には、優秀な人材の採用に繋げ、地域の活力としてまちを盛り上げてほしいと考えています。

現在「コクリエ」では、地域活動団体へスペースを開放したり、当社主催のセミナーやひたち立志塾と連携した学生と企業の交流会を開催するなど、毎月多くの出会いが生まれています。

私は、この「コクリエ」の運営が、当社の果たすべき社会的責任の1つであると考えています。



2015年グッドデザイン賞を受賞した「コクリエ」の内観「みんなのリビング」（画像提供：UNICAST）

最後に、御社の今後の展望をお聞かせください。

■ 地域に根差し、若い力で未来に挑戦

私の将来の夢は、ディズニーリゾートのスポンサー企業になることです。同社は技術を感じさせることなく、来場者の笑顔を作り出す最高の企業であると感じており、大変尊敬しています。

これに関連し、当社の福利厚生の一つとして、社員にディズニーチケットを支給しています。これは、同社の取り組みを現地で勉強して欲しいという願いと、いつも社員を支えてくれる家族に感謝の気持ちを伝えるきっかけにして欲しいという思いを込めています。

これからも、当社はミッションの実現に向け、地域に根ざした企業として自分たちに何ができるかを追求しながら事業に励んで参ります。

そして、1つのサービスに捉われることなく、ベンチャースピリットを胸に、ユニークな社員とともに魅力的なサービスを世界中に発信し、たくさんの笑顔を作り出していきたいです。



三ツ堀社長(中央)と日立支店 佐藤支店長(左端)と聞き手・藤咲耕一

この度は、長時間にわたり貴重なお話を聞かせていただきまして、誠にありがとうございました。御社の今後益々のご発展をご祈念いたします。

■ 文責・写真：筑波総研株式会社 研究員 富山かなえ